

卒業生の今
活躍する
医科歯科人

まえだ あゆみ

2010年東京医科歯科大学医学部医学科卒業。12年に渡米し、ニューヨークにあるベイスラエル病院で内科のインターンシップを行った後、13年7月より現職。

マサチューセッツ総合病院
麻酔科レジデント

前田 歩氏

産科麻酔の未来のために
心を尽くして貢献したい

マサチューセッツ総合病院の麻酔科で、レジデントとして働く前田歩さん。200人におよぶ麻酔科指導医と100室近くの手術室を擁する同病院で研修生活を送っている。前田さんは2009年、医学部6年生の時にハーバード大学医学部の学生派遣に参加。3カ月の留学期間の中で、米国の麻酔科に「産科麻酔」という専門分野があることを知り、こ

と考えるようになりました。幸いにも、留学中に会った産科麻酔医の先生たちが快く推薦文を書いて下さり、初期研修2年目の時に米国で就職活動をし、マサチューセッツ総合病院からポジションをいただくことができました」

前田さんは、学生時代について「いつもクラスメイトに助けてもらっていた」と振り返る。

「解剖学などの実習はもちろんのこと、ハーバード大学医学部の派遣前のトレーニングやPBLのグループで、皆と問診や身体診察の練習をしたことが懐かしく思い出されます。今でもクラスメイトには心から感謝しています」

また、学生時代には早くから海外で学ぶことに関心を持ち、4年次後期にはプロジェクトセメスターを利用してフィリピンにあるWHOの事務所でインターンシップも経験した。前田さんが医学の道を志したのは、開発途上国の医療に興味を持ったことがきっかけだ。



ベイスラエル病院でのインターン時代の同期生や先輩たち。

「開発途上国には、帝王切開が必要な状態になっても安全な麻酔を受けられないために命を落としてしまう妊婦さんが大勢います。限られた



「素晴らしい環境で研修をする機会を与えられて、感謝でいっぱいの日々です」と前田さん(左)。

資源の中でも安全に麻酔を行えるようなシステム作りや、現地の麻酔提供者への教育活動に携わることで、途上国での出産の安全性が向上するように少しでも貢献できればと考えています」

前田さんは同時に、日本国内の産科麻酔の発展のためにも貢献したいと考えているという。

「分娩時の硬膜外麻酔は、日本のお産をもっと幸せなものにする可能性を秘めた技術だと確信しています。現在では限られた施設でしか行われていませんが、近い将来、日本のどこにいても、痛みの少ないお産を望む女性達が硬膜外麻酔を選択できるようになればと願っています」

まだ今は麻酔医として歩き始めたばかりの前田さんだが、いつの日か夢をかなえる日がくるだろう。

DATA
マサチューセッツ
総合病院

1811年に開設したマサチューセッツ州ボストンにある総合病院。ハーバード大学関連の医療機関としても中心的な病院であり、東京医科歯科大学の学生派遣でも同病院が利用される。また、『ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン』の症例検討では世界的に希少な症例・難しい症例が提示されるなど常に医療・医学会の中心的役割を担っている。

